

しあわせ

5 月 号



じつぼうさんぜ むりようえ
十方三世の無量慧

いらによ じよう
おなじく一如に乗じてぞ

いらえんまんどうひようぜう
二智円満道平等

せつけざいえん ふしぎ
摂化随縁不思議なり

(『浄土和讃』四五)

十方世界のあらゆる仏がたは、おなじく
一如にめぐみ、迷悟すべてを見通す智慧
をひらいて平等のさとりを得ておられ、
衆生それぞれの縁に随って救われるその
はたらかきは思い量ることができません。

(意訳)

「手を合わす母」

さつきの鯉の吹き流し、なんて間がいいんでしょ。正直いさんポチ連れて。敵は幾万ありとても桃から産まれた・・・。

かつてお寺にあったボースカウトの子供たちが口ずさんでいた五月の陽気にぴったりの調子のよい歌を思い出す。そんな季節を迎えたが、コロナ終息の目途はつかず、オリンピック開催は、海外からの観客なしとなった。

コロナに限らず、政治的にも世界が混沌としてきている中、東京オリンピックが世界をつなぐ懸け橋になってほしいものである。

最近、哲学者の中に、**不出生主義**。生まれてこなければよかったという思想が広がっているという。生まれてきたから生きることば悩まねばならず、人間がいなければ、戦争も環境破壊もないと。

頂いた命の喜びが見えないとは悲しいことである。仏法は、『人身受け難し、今すでに受く』この一言が言える身になろうと説いている。

法座案内

花まつり

五月 九日(日) 午後一時～三時まで

降誕会法要

五月 十六日(日) 昼席

五月 十七日(月) 朝席・昼席
法話 自坊住職

法味の会ーご和讃のこころー

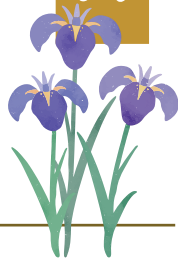
五月 二十一日 午前十時～

お話 自坊住職

※新型コロナウイルスの影響により急遽中止となった場合は、掲示板にてお知らせいたします。
※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目一五十三
栢原山 龍仙寺

電話(〇八二)二八二四八二



「一如のさとより」
いちにちよ

仏さまが、その智慧と慈悲のまなざしで見通されている領域を「一如」といいます。それは生死一如（しようじいちによ）といわれるように、生と死、自と他、善と悪など、わたしたちが真つ向から対立すると考えているものが、まどかにとけあっているような物事の在り方だと言われます。そのような一如の領域をさとることにより、生と死を一望のもとに見通し、他者の苦しみを我が苦しみとして感じとり、母がその一人子をいのちをかけて守るように、あらゆる人々に量りなき慈しみをおこす、そういう方が仏さまなのです。

禅の大家であった久松真一先生ひさまつしんいちのお弟子さんに、京都大学で哲学の教授をされていた方がおられたそうです。戦時中、その方もついでに出征することになり、久松先生のお寺にご挨拶に伺ったところ、物資のきびしい時代でしたが、先生はお茶と甘いお菓子を出し

てくださいました。まずご報告をすませ、お茶に手をのばしたとき、先生は仰いました。

「〇〇君、人間というものは
いつ死んでもいいものですね」

思わず、お茶をとっていた手がとまりました。たしかに、生まれたかぎり、人はいつか必ず死んでいかねばなりません。それはいのちの道理であり、けっして驚くべきことではありません。生がいのちの営みならば、死もまたいのちなのでしょう。しかし、いかに理屈ではうなづけても、わが事となったとたん、その正しい道理は、受けいれ難い苦悩へと一変します。その方は、先生の問いに「はい」とは答えられませんでした。しかしまた、戦況の悪化していた当時ですから、「死にたくない」とも言えません。その後、しばらく閑談した後、そろそろお暇しようと腰をあげようとしたとき、また久松先生は仰いました。

「けれど〇〇君、体だけはいといなさいや。けっして無駄な死に方したらいいけませんよ」
いつ死んでもいい、という先ほどの言葉とは正反対の恩師の言葉に、その方はとまどうばかりでした。ふと顔を上げると、久松先生は両目に涙をためておられたそうです。その方は結局、最初から最後まで「はい」とも「いえ」とも答えられませんでした。

「あのととき、わたしは恩師から一生かけて解くべき公案（問い）をいただきました。わたしはあのとときの恩師の問いかけに、どちらも「はい」と素直にお答えできる、そういう人になりたいと思って生きてきました。」

戦争から戻って大学に復職されたその方は、晩年、そのように仰っていたそうです。

生れなければ死ぬこともなく、死なないような生れ方もありません。生と死は、けっして分けることができません。であるならば、「いつ死んでも、いいものですね」という問

いにも「はい」と答え、「生あるかぎり、いのちを大事にしましょうね」という問いかけにも「はい」と答えられる。その人こそが、いのちの尊さにめざめた人なのでしょう。

十方三世の無量慧
じつぽうさんぜ　むりょうゑ

おなじく一如に乗じてぞ…

ご門徒さんのお宅へお参りしていると、お父さんやお母さんがお仏壇のまえで、おさな子のみじのような両手をとって合掌させてくださっている、そういう姿によく出遇います。合わさるはずのないこの両手を、合わせてくださるぬくもりがあるのですね。

生が尊いならば、死もまた尊い。そのような言葉はわたしの中から決して出てきませんが、仏さまが、合わさるはずのないこの両手を、合わせてくださいます。ともにお聴聞いたしましょう。生死一如と見通されている仏さまの仰せを、お聞かせいただきますように。